

緒言

日本最古の歴史書は 712 年に完成した古事記であり、最古の正史は 721 年に完成した日本書紀である。日本の古代史を探る上で、記紀（古事記と日本書紀）以外には信頼できる資料はない。しかし、記紀は戦前の皇国史観に利用された反省から、教育現場で語ることは禁止されている。また、現在の歴史学会では記紀は後世の作り話とする津田左右吉博士の説が広く支持されている。しかし、津田学説も仮説であって、決定的な証拠はない。考古学の分野では、津田説を否定するような新たな発見が相次いでいる。例えば、1978 年に埼玉県の新井山古墳から出土した鉄剣銘に「ワカタケル大王」の名があり、これを雄略天皇に比定する見解が定説になっている。また、島根県の荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡は、出雲神話が全くの作り話ではないことを示唆する。福岡県糸島市の平原 1 号墳から出土した大型内行花文鏡は八咫の鏡である可能性が指摘されている。

古代、中国や日本では、王は天帝の子であり、天命を受けて天下を治める天子であると考えられていた。日本の皇帝は天帝の子孫であるから天皇なのである。記紀は天皇の正統性（皇位継承が正しく行われて万世一系であること）を保証するための歴史書である。天皇が天命を受けて天下を治める天子であることを示すためには、祖先は天上の神の世界に住んでいて、天皇はそこから地上に降りてきたことにしなければならない。これが、記紀が神話になっている理由であると考えられる。つまり、初代天皇以前の歴史を神話にすることは必然であったのである。従って、日本神話には史実が含まれている可能性が高く、これを研究しないことは学問的損失であると考えられる。

実際、天照大御神（アマテラスオオミカミ）と邪馬台国の女王卑弥呼はモチーフが似ていることが指摘されている。つまり、記紀の神話部分は、魏志倭人伝の時代と重なる可能性が高い。筆者は、前に報告した論文¹⁾⁻³⁾で、縄文時代末に江南から倭人族が、また朝鮮半島から倭族と古朝鮮族が九州に渡ってきたこと、古朝鮮族はさらに東進して前期末には近畿に達したこと、倭種（倭族と倭人族）は釜山、対馬、壱岐および 30 国を作ったこと、邪馬台国は朝倉市甘木にあったこと、倭国の大乱は邪馬台国と倭国（狗邪韓国、對馬国、一大国、末廬国、伊都国、奴国および不彌国）の戦争であったこと、大倭とは邪馬台国であること、一大率は後漢および魏が邪馬台国を監視するために置いた長官であること、狗奴国は大分県の宇佐市付近にあったことなどを示した。著者は、この論文で、古事記の早世編は倭種が大陸から渡ってきて九州を統一するまでの歴史を神話化したものであることを示す。

1. 天地開闢

1-1 造化三神と別天神

古代中国では、天と地は、もともとは混沌として一つであったのが、天と地に分離したと考えられていた。この天と地が分離して世界が始まったことを天地開闢という。縄文時代の

縄文時代の末期に、江南から倭人族が東シナ海を渡って、朝鮮半島から倭族が玄界灘を渡って、縄文人が住む北部九州にやってきた。東シナ海では、空と海が一つになったような水平線が連なっている。日本語では、「あま」は「天」であり、「海部」や「海女」のように海でもあるので、この空と海が一つになったような状態が「あま」であったと考えられる。「あま」を渡ってきた倭人たちが水平線から日本列島が姿を現すのを目にした時、それはあたかも天と地が分離したかのように思われたのではないだろうか。これが、日本列島における倭国の歴史の始まりであり、古事記で云うところの天地開闢の時であると考えられる。

倭人族と倭族は縄文人が住む九州に渡ってきて国を作った。従って、天と地が初めて分かれた時に高天原に出てきた三柱の神（造化三神）は、これらの三種族を神格化したものであると考えられる。「御」には「すべる」、「中」には「空間的に仕切られた物の内部」、「主」には「居る」の意味があるから、天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）は「島の中に暮らす人びとを統べる神」の意味である。従って、この神は日本列島の先住民族である縄文人を神格化したものであると考えられる。次に、「高」には「相手への敬意を表わす言葉」、「御」には「すべる」、「産」には「財産」、「巢」には「住まい」、「日」には「毎日。日々」の意味があるから、高御産巢日神（タカミムスビノカミ）は「財産や家や毎日の生活を統べる高天原の神」の意味であると考えられる。また、「神」には「きわめて尊い」の意味があるから、神御産巢日神（カミムスビノカミ）は「財産や家や毎日の生活を統べる尊い神」の意味であろう。高御産巢日神は倭人族を、神御産巢日神は倭族を神格化したものであると考えられる。

この他にも、日本列島に渡ってきた人種がいた。一つは、紀元前 108 年に漢の武帝が衛氏朝鮮を滅ぼしたために、満州から日本海沿岸に渡ってきた人種（古満州族）である¹⁾。古満州族は倭人族や倭族よりも遅れて渡ってきたにも拘わらず、2 世紀から 3 世紀に四隅突出型墳丘墓を築造するなど著しく勃興が著した。この古満州族を神格化したのが宇摩志阿斯詞備比古遲神（ウマシアシカビコジノカミ）であると考えられる。その理由は、宇摩志阿斯詞備比古遲神の意味にある。「宇」には「何事かを成し遂げようとする心の動き」、「摩」には「みがく」や「近づく」、「阿」には「のき、ひさし」、「斯」には「切り裂く」、「詞」には「言う」、「備」には「整える」の意味があるから、宇摩志阿斯詞備比古遲神は、「遅れてやって来て、自分たちの志を達成するために、元からあった家並みを壊し、整えた人々」の意味である。また、HLA ハプロタイプの分析によって、中国南部から琉球諸島を経て太平洋南側へ渡ってきた B54-DR4 系統がいたことがわかっている¹⁾。おそらく、この種族は、紀元前 2 世紀末に武帝によって滅ぼされた越族であろう。この種族は魏志倭人伝に女王国の南にあったと記されている侏儒国、黒齒国、および裸国等の島国を築いた人たちであるので、「天常立神」と神格化されたと考えられる。

尚、倭族と共に朝鮮半島西部（後の百済）から渡ってきて、主として近畿地方に住みついた種族（古朝鮮族）がいた¹⁾。旧唐書東夷伝倭国日本国の条（旧唐書倭国日本国伝）と新唐書東夷伝日本の条（新唐書日本伝）には、倭国の東に日本国があつて、両国は争っていたと記されている。従って、古朝鮮族は日本国を築いて倭国と対立したので、別天神から除外さ

れたものと考えられる。

1-2 神世七代

日本神話で天地開闢の時に、別天神に続いて生まれた七代の神を神代七代と呼んでいる。先ず生まれた国之常立神（クニノトコタチノカミ）は、「国土が永久に存在する」との意味である。次に生まれた豊雲野神（トヨクモヌノカミ）は「野原には雲が広がっている（雨が多い）」の意であると考えられる。

第三代は宇比地迺神（ウヒジニノカミ）と須比地迺神（スヒジニノカミ）である。「宇」には「家」、「須」には「使用する」、「比」には「並ぶ」、「地」には「田畑」、「迺」には「近い」の意味があるから、宇比地迺神（ウヒジニノカミ）は「田畑の近くに家が並んで建っている」の意味であり、須比地迺神（スヒジニノカミ）は「その田畑が使われている（耕作されている）」の意味であると考えられる。

第四代は、角杙神（ツノグイノカミ）と活杙神（イククイノカミ）である。「角」には「物の表面に突き出ている物」、「活」には「勢いよく動く」、「杙」は「クイ」の意味であるから、角杙神（ツノグイノカミ）は「植物が芽生える」、活杙神（イククイノカミ）は「植物が生長する」の意味であると考えられる。

第五代は、意富斗能地神（オオトノジノカミ）と大斗乃辨神（オオトノベノカミ）である。「意」には「思い」、「富」には「満ち足りている」、「斗」には「少ない事」、「能」には「働く」、「地」には「大地」の意味がある。また、「大」には「年齢が上である」、「乃」には「先に」、「辨」には「分ける」の意味がある。従って、意富斗能地神は「大地でつまらない仕事で満足している」、大斗乃辨神は「年上の者から小さい者を分ける（生む）」の意味である。即ち、意富斗能地神と意富斗能地神は動物の雌雄であると考えられる。

第六代は、淤母陀琉神（オモダルノカミ）と阿夜訶志古泥神（アヤカシコネノカミ）である。「淤」には「ふさがる」、「陀」には「破れる」、「琉」には「宝石の名前」の意味があるから、淤母陀琉神は「妊娠した女性が出産する」の意味であると考えられる。また、「阿」には「おもねる」、「訶」には「叱る」、「古」には「この状態になって長い時間がたっている」、「泥」には「女性に対して強引に性的行為を行う」の意味があるから、阿夜訶志古泥神は「性行為は夜に行い、女性を強姦することを禁止している」の意味であると考えられる。つまり、淤母陀琉神と淤母陀琉神は人の男女であると考えられる。

これらをまとめると、大地があって、空には雲があって、大地には家や田畑があって、植物が繁り、動物がいて、先住民が生活を営んでいる風景が目浮かぶ。従って、この六代の神は、倭種が日本に渡ってきた時に目にした日本列島の自然を神格化したものであると考えられる。そのような日本列島に伊邪那岐神（イザナギノカミ）と伊邪那美神（イザナミノカミ）が現れたのである。「伊」は「この」、「邪」には「正しくない」、「那」には「美しい」、「岐」には「分かれ道」の意味があるから、「伊邪那岐」は「これまでの正しくないことを美しいことに替えた神」の意味であると考えられる。また、「美」には「優れている」の意

味があるから、「伊邪那美」は「これまでの正しくないことを美しく優れたものに変えた神」の意味であろう。従って、日本列島に辿り着き、倭国を造った倭人族と倭族を神格化したものが伊邪那岐神と伊邪那美神であると考えられる。

2. 伊邪那岐神と伊邪那美神の神話

2-1 国生み

縄文時代晩期、倭人族が会稽（現在の紹興市）から船に乗って、櫓を漕いで日本列島に渡ってきた。従って、『天の浮橋』は船であり、『天の沼矛』は櫓であると考えられる。「淤」には「ふさがる」、「能」には「物事を上手く成し遂げる」、「碁」には、「呂」には「長い」の意味であるから、淤能碁呂（オノゴロ）島は「塞がったものを碁石のように長く配置した」との意味であり、「塞がったもの」は火山であると解される。古代、江南から有明海に至る航路があり、その出発地の会稽は現在の紹興市である。紹興市を船出して東に進むと火山島が連なるトカラ列島にたどり着くので、これがオノゴロ島であると考えられる。倭人はトカラ列島からさらに日本列島を目指したが、この航海は危険を伴うものであったに違いない。「水蛭子（ヒルコ）を葦で作った船に乗せて流した」との神話は、海が荒れたために船が転覆して人々が死亡したことを、「淡島」は難破した船が九州以外の島に漂着したことを示唆する。

筆者は、前に報告した論文¹⁾で、倭人族は江蘇省に、倭族は山東省に居住していたことを示した。倭人族は縄文時代の末に前者は江南から、トカラ列島を経て九州の西岸沿いに北上して有明海に渡ってきた。これは、東シナ海の周囲を左廻りしたことになる。一方の倭族は遼東半島から朝鮮半島を経由して北部九州に渡ってきた。これは東シナ海の周囲を右廻りしたことになる（図1）。伊邪那岐神が天御柱を左廻りし、伊邪那美神は右廻りし、出会ったところで子作りをしたとの説話は、このことを基に創られたと考えられる。「柱」には「中心」の意味があるから、「天御柱」とは東シナ海・黄海のことであると考えられる。

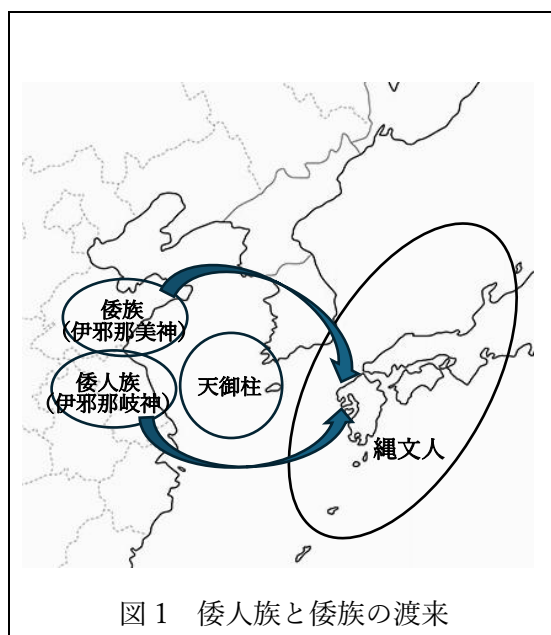


図1 倭人族と倭族の渡来

筆者は先の論文¹⁾で、倭人族は西九州に、倭族は北部九州一帯に住みついたが、古朝鮮族はさらに東に進み、瀬戸内を経て弥生時代前期末には近畿および東海に達したこと、弥生中期になると、倭族は東進を開始し、中期末には瀬戸内を経て淡路島に達したことを示した。つまり、倭族は朝鮮半島を発って、対馬、壱岐、九州、四国を経て淡路島に達したのであり、これを逆にしたのが国生みの神話の淡路島から対馬までの部分であることに気づく。九州

の前に隠岐の島が生まれたとされることは、倭族は日本海方面では隠岐の島まで進出していたことを示唆する。

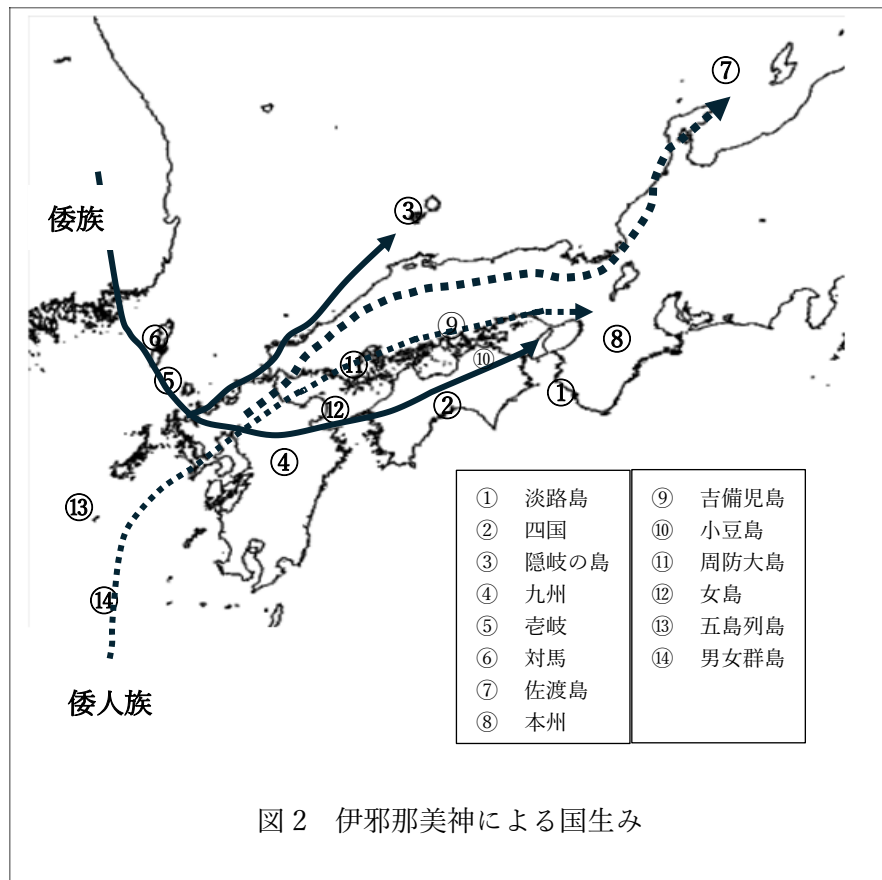
弥生後期になると倭人族が建てた邪馬台国が台頭し、倭国の大乱に勝利して、筑紫国と肥国を統一した²⁾。詳細は後述するが、邪馬台国の女王卑弥呼が天照大御神であると考えられ、国譲りの神話や神武東征の神話は邪馬台国が東遷したことを示唆する。邪馬台国の東遷が歴史の起点であるから、過去に起った倭族の東進は過去に遡る形で神話化されたものと考えられる。倭人族の邪馬台国は先ず日本海を東進し山陰から越国を制圧、最後に、倭人族の邪馬台国は瀬戸内を東進して大和を制圧した。これらを基にして創られたのが国譲りの神話と神武天皇の東征伝説であると考えられる。このため、国生み神話では、対馬の後に佐渡島が生まれ、最後に本州が（大倭豊秋津島）が生まれたことにされたのである（図2）。

秋津（アキヅ）はトンボのことであると解釈されている。それは、日本書紀の神武天皇紀に、天皇が腋上（ワキガミ）の嚙間丘（ホホマノオカ）に登って国の状況を見回して、「あゝ！良い国を得たものだ！内木綿之眞迹国ではあるが、蜻蛉が繋がっているようでもあるなあ。」と言ったのが、秋津洲という名前の由来であると書かれているからである。しかし、「秋」には「穀物が実る」、「津」には「人が多く集まる」の意味があるから、「秋津洲」の本来の意味は「穀物が実り人びとが大勢いる洲」の意味である。従って、内木綿之眞迹国は豊で人が沢山いる州であって、それが蜻蛉が繋がっているように見えると解釈すべきであると考えられる。内木綿之眞迹国とはどのような国であろうか。木綿が日本に伝わったのは799年と言われるので、日本書紀が編纂された頃には木綿は存在せず、綿はくず繭を煮て引き延ばした綿であった。また、「綿」にはからみつく」の意味があるから、「木綿」は「綿が木に絡みついたように緑の葉っぱの間に白い物がある」の意味であり、転じて「稲の花が咲いている様子」であると考えられる（写真1）。従って、「内木綿之眞迹国ではあるが、蜻蛉が繋がっているようでもある」とは、「稲の花が、蜻蛉が止まっているように見える」の意味であろう。また、「内」には「自分が住んでいる国」、「眞」には「本当のこと」、「迹」には「迫る」の意味があるから、「内木綿之眞迹国」は「国中に稲が実っている」の意味であると考えられる。同じ日本書紀の神武天皇紀に、饒速日命（ニギハヤヒノミコト）は天磐船に乗って大虚を廻って、この国を見て降臨し、この国を『虚空見日本国』と言ったと書かれている。



写真1 稲の花

「虚」には「中のものがない」、「空」にも「中のものがない」の意味があるから、これは「日本国には見るべきものが何もない」の意味である。従って、大倭豊秋津島（本州）の別名为天御虚空豊秋津根別（アミツミソラトヨアキツネワケ）は、「未開の地であったが実り豊かになった」との意味であると考えられる。



このように、国生みの神話は、倭種が日本列島に渡ってきて大和に政権を開くまでの歴史の概略を示したものと考えられる。尚、古事記では、伊予国は愛比売（エヒメ）、讃岐国が飯依比古（イヒヨリヒコ）、粟国は大宜都比売（オオゲツヒメ）、土佐国は建依別（タケヨリワケ）と呼ばれている。上述したように、四国には古朝鮮族が住みついたが、弥生時代中期になると、九州から侵略してきた¹⁾。このことは祭祀用銅剣や銅矛が出土することによってわかる。中細形銅剣の分布の中心は大分県から淡路島にあり、最も大型化した平形銅剣の分布の中心は愛媛県と香川県にある。「愛」には「機嫌を取る」の意味があるから、「愛比売」は「倭族の機嫌をとった人々」の意味であろう。また、「依」には「たよる（助けになると思う）」の意味があるから、「飯依比古」は「飯を頼りにした人」の意味であり、転じて「倭族に米を差し出した人々」の意味であると解される。つまり、伊予国と讃岐国に住んでいた古朝鮮族は倭族の支配をすぐに受け入れたのである。一方、徳島県では武器型青銅器は出土せず、銅鐸が出土する。従って、阿波国は倭族の侵略を受けず、近畿地方と同様に古朝鮮族が居住していたと推察される。「宜」には「状況があっている」の意味があるから「大宜都比売」は「(古朝鮮族)の都とおぼしき所に住む人々」の意味であろう。これらの3国の名前の敬称には「比古」または「比売」が使われているが、土佐国には「別」が使われている。

このことは、土佐国には古朝鮮族とは異なる種族、恐らく、中国南部から渡ってきた種族が居住していたことを示唆する。

九州では、筑紫国には白日別、豊国は豊日別、肥国は建日向日豊久士比泥別、熊曽国は建日別と呼ばれている。筑紫国には主に倭族と倭人族が、肥国には主に倭族と倭人族と縄文人系弥生人が、豊国には主に倭族が、熊曽国には主に縄文人系弥生人が居住していた。このように人種が異なるために、これらの4国の名前の尊称には「別」が用いられたと考えられる。「白」には「清い」「正しい」「優れている」、「日」には「天皇に関していう語」の意味があるから、「白日別」は「聖なる天皇が生まれた国」の意味であると考えられる。また、「豊」には「豊にする」の意味があるから、「豊日別」は「天孫を豊にした国」の意味であろう。また、「建」には「布告する」、「向」には「敵対する」、「士」には「戦士」、「比」には「争う」、「泥」には「名誉や誇りを傷つける」の意味があるから、「建日向日豊久士比泥別」は「筑紫国と敵対して長期間に渡って攻撃し合った国」の意味であると考えられる。さらに、「建日別」は「筑紫国に従属なかった国」の意味であると考えられる。古事記で九州が筑紫島と呼ばれているのは、筑紫国の倭人族が九州を統一したからであると考えられる。

神武東征伝説では、日向を出立した神武天皇は、宇佐の足一騰宮、筑紫の岡田宮（現在の北九州市八幡西区黒崎）、安芸国の多祁理宮（現在の広島市）、吉備国の高島宮（岡山県児島市）を経て、白肩津（現在の東大阪市）に着いた。これは、島が生まれた順序（吉備児島→小豆島→周防大島→姫島）の逆である。また、姫島の次に知訶島（五島列島）が生まれ、最後に両児島（男女群島）が生まれたとされるが、これは倭人族が江南から渡ってきた航路にある島である。従って、島生みの神話は、倭人族が江南から日本列島に渡ってきて大和政権を建てたことを示すために創られたと考えられる。

2-2 神生み

図3は、ウィキペディアから引用した伊邪那岐神と伊邪那美神が生んだ神々の関係図である。これらの神々は4つのグループに分けられる。Aグループに属するのは、最初に生まれた大事忍男神（オオコトオシオノカミ）から大綿津見神（オオワタツミノカミ）までの8柱である。Bグループは、速秋津日子神（ハヤアキツヒコノカミ）と妹の速秋津比売神（ハヤアキツヒメノカミ）、およびこの2柱の子の沫那芸神（アワナギノカミ）、沫那美神（アワナミノカミ）、頬那芸神（ツラナギノカミ）、頬那美神（ツラナミノカミ）、天之水分神（アメノミクマリノカミ）、天之久比簀母智神（アメノクヒザモチノカミ）、および国之久比簀母智神（クニノクヒザモチノカミ）である。Cグループに属するのは、風の神の志那都比古神（シナツヒコノカミ）、木の神の久久能智神（ククノチノカミ）、山の神の大山津見神（オオヤマツモノカミ）および野の神の鹿屋野比売神（カヤノヒメノカミ）の4柱、および大山津見神と鹿屋野比売神の子の8柱である。Dグループに属するのは、鳥之石楠船神（トリノイハクスフネノカミ）またの名を天之鳥船（アメノトリフネ）、大宜都比売神（オオゲツヒメノカミ）および火之夜芸速男神（ヒノヤギハヤオノカミ）またの名を火之迦具土神（ヒノカ

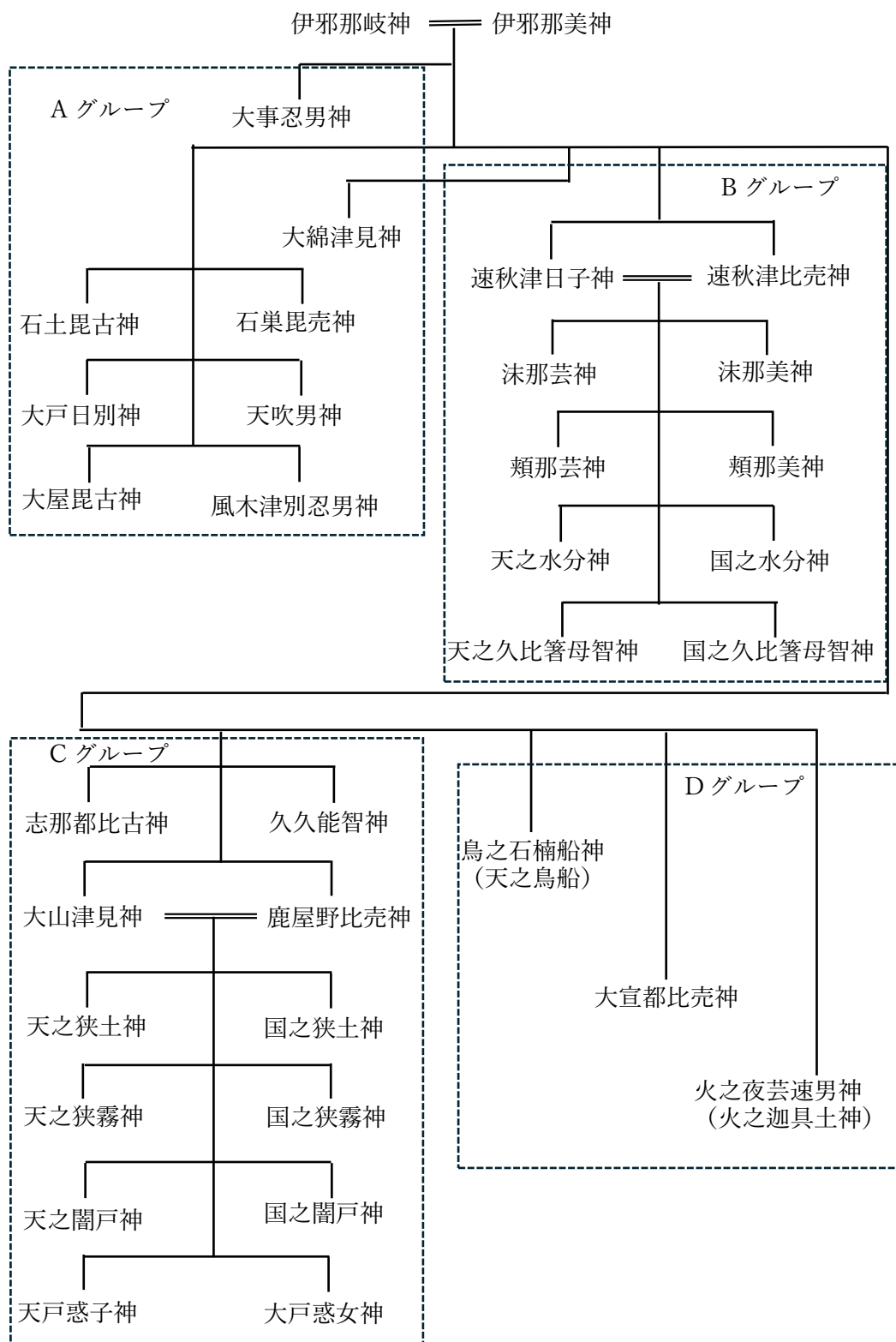


図 3 伊邪那美神が生んだ神

グツチノカミ)の3柱である。天之鳥船は国譲りの段で建御雷神(タケミカヅチノカミ)と共に登場し、大宜都比売神は須佐之男命に斬り殺されたとされる。また、火之迦具土神は伊邪那岐命によって斬り殺されたとされる。このように、これらの3柱は他の神とは性質を異にするので、これらを除くと残りは30柱である。

表1 倭の30国と比定地

グループ	地域	国(比定地)
1	邪馬台国に至る 行程にあった国	狗邪韓国(釜山市)、對馬国(対馬)、一支国(沱岐)、 松廬国(唐津市)、伊都国(糸島市)、奴国(福岡市・ 春日市)、不彌国(宇美町)、邪馬台国(朝倉市)
2	肥前 肥後	都支国(鳥栖市・基山町)、彌奴国(神崎市・佐賀市)、 斯馬国(武雄市)、已百支国(大村市・佐世保市)、伊 邪国(諫早市) 投馬国(玉名市)、好古都国(菊池市)、不呼国(宇土 市)、姐奴国(八代市)、對蘇国(阿蘇市)
3	宗像 筑豊 豊前	烏奴国(宗像市) 巴利国(桂川町) 支惟国(行橋市・北九州市)、狗奴国(宇佐市)
4	豊後 熊曾国	躬臣国(日田市)、邪馬国(大分市)、蘇奴国(竹田市・ 豊後大野市) 呼邑国(児湯郡)、華奴蘇奴国(都城市・人吉市)、鬼 国(南さつま市)、為吾国(始良市)、鬼奴国(鹿屋市)

魏志倭人伝によれば、倭には30国があった。これらの30国は朝鮮半島南端から九州全域に分布していたと考えられ³⁾、これらを地域別に分けると表1のようになる。グループ1は帯方郡から邪馬台国に至る行程に位置する国々であり、その数はグループAの神の数と同じ8である。グループ2は肥前(佐賀県および長崎県)にあった5国(都支国、彌奴国、斯馬国、已百支国、および伊邪国)と、肥後(熊本県)にあった5国(投馬国、好古都国、不呼国、姐奴国、および對蘇国)であり、その総数はグループBの神の数と同じ10である。第3のグループは、宗像・筑豊・豊前にあった4国(烏奴国、巴利国、支惟国、および狗奴国)であり、第4グループは豊後および熊曾国(宮崎県および鹿児島県)にあった8国(躬臣国、邪馬国、蘇奴国、呼邑国、華奴蘇奴国、鬼国、為吾国、および鬼奴国)である。グループ3の国数は、風の神、木の神、山の神および野の神の4柱と一致し、グループ4の国数は大山津見神と鹿屋野比売神の子とされる8柱と同じである。

これらのことは、伊邪那岐命と伊邪那美命が結婚したことによって生まれた神々は、倭の30国の王のことであることを示唆する。「大」は「尊敬して上に添える言葉」であり、「忍」

には「つらいことを我慢する」、「事」には「政治」の意味があるから、大事忍男神（オオコトオシオノカミ）は「困難を乗り越えて政治をおこなっている偉大な王」の意味であり、邪馬台国王のことであると考えられる。また、「綿」には「連なる、長く続く、絶えない」の意味があり、転じて「海」を表わす。「津」には「港」、「見」には「役目として取り扱う」の意味があるから、大綿津見神は「海と港を支配する神」の意味であり、玄界灘に面する奴国の王であると考えられる。また、朝鮮半島は栄養分の少ない岩石で出来ているといわれるので、石土毘古神（イワツチビコノカミ）は狗邪韓国王のことであろう。「石巢」は「石が集まっている」の意味である。対馬の海岸の多くは小石に覆われているので、石巢比売神（イワスヒメノカミ）は対馬国の王であると考えられる。「戸日別」は「戸で太陽からわけ＝家」の意味であるから、「大戸日別」は家が沢山あるとの意味である。伊倭人伝によれば、対馬国や松廬国の戸数は千戸であるのに対し、一大国には三千戸があった。従って、大戸日別神（オオトヒワケノカミ）は一大国王であると考えられる。また、「大屋」は「重要人物の家」の意味であるから、大屋毘古神（オオヤビコノカミ）は伊都国王であると考えられる。不彌国の都は糟屋郡宇美町にあったと考えられる³⁾。宇美町の東は糟屋郡篠栗町を経て筑豊地方である。詳細は後述するが、風の神や木の神は筑豊地方や豊前地方の王であり、これらの地域に居住する人たちは邪馬台国と対立していたと考えられる。従って、風木津別之忍男神（カザモツワケノオシオノカミ）は、邪馬台国に対立する筑豊・豊前と、大綿津見神が治める奴国に挟まれた国（不彌国）の王の意味であると考えられる。

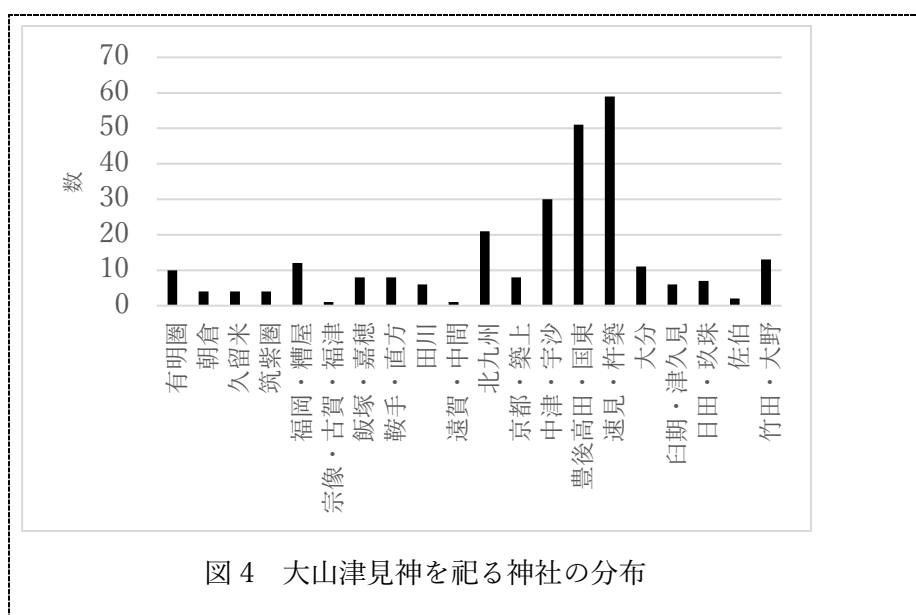
次にBグループの神は、肥前と肥後にあった国の王であると考えられる。「速」には「すみやかに」、「秋」には「盛りを過ぎる」、「津」には「港」の意味があるで、「速秋津」は「昔は繁栄していたが廃れた港」の意味であると解される。肥前では、佐賀市・旧神崎郡に吉野ヶ里遺跡等の弥生遺跡が集中していて、この地域に彌奴国があったと考えられる。また、魏志倭人伝に記載されている投馬国は熊本県玉名市付近にあったと推定される。従って、速秋津日子神と速秋津比売神は、以前は地域の盟主であったが邪馬台国に従属することになった彌奴国王と投馬国王であると考えられる。また、「頬」は「顔・顔つき」の意味である。肥前風土記によれば、値嘉島（五島列島）には隼人に似た風貌と言葉を話す人たち（縄文人）が住んでいた。恐らく、弥生時代には、縄文人は九州本土の西部にも住んでいたと推察されるので、頬那芸神（ツラナギノカミ）と頬那美神（ツラナミノカミ）は長崎県にあった已百支国王と伊邪国王であると考えられる。また、有明海と八代海は宇土半島で分断されており、不呼国があった宇土は半島の北部に、姐奴国があった八代市は半島の南部に位置している。従って、天之水分神（アメノミマクリノカミ）と国之水分神（クニノミマクリノカミ）は不呼国王と姐奴国王であると考えられる。また、「沫」は「すぐ消える泡」の意味であり、「那」には「多い」、「芸」には「限界」の意味があるから、沫那芸神（アワナギノカミ）は「泡が非常に多い」、沫那美神（アワナミノカミ）は「泡が非常に美しい」の意味である。有明海沿岸には、上記の諸国以外に、筑後川河口の鳥栖にあった都支国王と杵島郡（武雄市）にあった斯馬国があったので、両国の王が沫那芸神と沫那美神であると考えられる。さらに、「久」

には「長い時間がたっている」、「比」には「争う」、「箸」には「著しい」、「母」には「根源」、「智」には「はかりごと」の意味であるから、「久比箸母智」は「昔から謀をして争っている」との意味である。従って、天之久比箸母智神（アメノクヒザモチノカミ）と国之久比箸母智神（クニノクヒザモチノカミ）は菊池郡にあった好古都王と阿蘇郡にあった對蘇国王であり、両国は国境を接して対立していたものと推察される。

C グループの神は九州東部の国の王を神格化したものであると考えられる。縄文時代、温暖化による縄文海進のため筑豊地方は直方まで海であった。その後、地球が寒冷化すると、海外線は次第に後退し、川が運ぶ土砂によって海は埋め立てられていった。さらに埋め立てが進行すると、遠賀川流域には沢山の沼や湖が生じた。遠賀川流域は当時日本最大の干潟であり、遠賀の地名は「大きな干潟」であるといわれる。豊国の「豊」はアイヌ語の[*to-yopi*]（湖沼が枝分かれしている）に由来すると考えられる³⁾。これらの湖沼の周囲は葦原であったであろう。世界大百科事典第2版には、「葦原の中国とは葦の葉がざわざわと不気味にさわぎ未開の地を示し、荒ぶる国つ神が蟠踞する混沌とした無秩序の世界であった。そこはまた人間生活の中心地に対する野蛮な周辺部でもあり、死者が住むとされた山や原始林地帯との中間地でもあった。」と記されている。風の神、木の神、山の神および野の神は、この「葦原中国」の定義に合致している。「葦原中国」は「豊葦原水穂国」とも言うが、この「豊」は豊国の意味であると考えられる。また、日本書紀の第七段一書（三）には、高天原で乱暴狼藉を働いた須佐之男命は捕らえられ、高天原にも葦原中国にも住むことを許されず、底根之国に追放されたと書かれているから、葦原の中国は出雲ではなかったことがわかる。これらのことから、筑豊地方が狭義の「葦原中国」であることを示唆する。

山の神の別名は大山津見神である。インターネットの検索サイト（日本の神社・寺院検索サイト：八百万の神）で検索すると、大山津見神（オオヤマツミノカミ）は祀る神社は福岡県と大分県に多く、その分布の中心は豊前地方の宇佐・豊後半島付近にある（図4）。延喜式が編まれた10世紀初頭まで、殆どの神社の祭神には名前がついておらず、鎌倉時代末期以降になって、祭神を、地名・社名から日本神話に登場する神、あるいは「命・尊」「彦・比古」「姫・媛・比売」などをつけた人格的な神とするようになった。このため、神社の由緒は不確実なものであり、祭神は伝承によるものである。宇佐市付近には狗奴国があった³⁾。従って、大山津見神は狗奴国王を神格化したものであると考えられる。尚、古事記には大山津見神の子を名乗る神が何度か登場する。須佐之男命の妻になった櫛名田比売（クシナダヒメ）の父母、足名椎（アシナヅチ）と手名椎（テナヅチ）は大山津見神の子を名乗っている。また、須佐之男命は大山津見神の娘である神大市比売神（カムオオイチヒメノカミ）との間に大年神（オオトシノカミ）と宇迦之御魂神（ウカノミタマノカミ）をもうけている。さらに、須佐之男命と櫛名田比売の子である八島士奴美神（ヤシマジヌミノカミ）は、大山津見神の娘の木花知流比売（コノハナチルヒメ）と結婚して布波能母遅久奴須奴神（フハノモジクヌスヌノカミ）を生んでいる。布波能母遅久奴須奴神の子孫が大国主神であるが、日本書紀では大国主神は須佐之男命と櫛名田比売の子である。このように、大山津見神は須佐之男

命の系譜と関連が深い。そして、大国主神は葦原中国の領有を巡って高天原と争う。上述したように、葦原中国は筑豊地方であったと考えられるから、狗奴国王は筑豊地方を含む九州東北部を支配していたものと推察される。大山津見神の名は、宇佐市は前は周防灘に面し、背後には英彦山等の 1000m 級の山が迫っていることに由来すると考えられる。



野の神の別名は鹿屋野比売神（カヤノヒメノカミ）であるが、「鹿」は「山の麓」、「屋」は「家」の意味であるから、鹿屋野は「野を囲む山の麓に家がある」との意味である。鳥奴国に比定される宗像市は周囲を山に囲まれており、大井三倉遺跡、東郷登り立遺跡、久原遺跡、光岡長尾遺跡、田熊石畑遺跡等の弥生遺跡は山の麓に存在する。従って、野の神（鹿屋野比売神）は鳥奴国王であると考えられる。

風の神の別名は志那都比古神（シナツヒコノカミ）である。「志」は「こころざし（ある方向を目指す気持ち、目標）」、「那」は「離れた人や物を指していう言葉。あれ。あの。」の意味であるから、「志那都」は「あの都の目標になった」の意味である。巴利国は嘉穂郡桂川町にあったと推定されるが³⁾、桂川町の南は三郡山地を隔てて邪馬台国の都があったと考えられる。詳細は別稿に譲るが、邪馬台国と狗奴国は葦原中国の領有を巡って争った。従って、志那都比古神は、邪馬台国が葦原中国に侵略した際の最初の攻撃の目標になった国の王の意味であり、巴利国王であると考えられる。また、木の神（久久能智神）は行橋市付近にあった支維国王であると考えられる。「久」には「古くからの」、「能」には「働き。力」、「智」には「知恵」の意味があるので、この神の名は「知恵と行動力がある王」の意味であると解される。

残りの 8 柱は、豊後と熊曽国にあった 8 国の王であると考えられる。当時は海面が高かったため、現在の大分平野や宮崎平野の大部分は海であり、平野部は少なかった。従って、

天之狹土神（アメノサヅチノカミ）と国之狹土神（クニノサヅチノカミ）は大分市にあった邪馬国王と宮崎県児湯郡にあった呼邑国王であると考えられる。また、日田市や竹田市は霧が多いことが知られているので、天之狹霧神（アメノサギリノカミ）と国之狹霧神（クニノサギリノカミ）は日田市にあった躬臣国王と竹田市・豊後大野市にあった蘇奴国王であると考えられる。また、「戸」は「家」を意味するので、「閨戸」や「大戸惑子」は、家が倭種の家とは違っていたことを示唆する。従って、天之閨戸神（アメノクラトノカミ）、国之閨戸神（クニノクラトノカミ）、大戸惑子神（オオトマトヒコノカミ）および大戸惑女神（オオトマトヒメノカミ）は縄文人系弥生人が居住する熊曾国にあった華奴狗奴国、鬼国、為吾国および鬼奴国の王であると考えられる。狗奴国があったと推定される国東市の安国寺遺跡から出土した安国寺式土器は東九州の標識土器とされ、日向や大隅でも出土する。また、詳細は別稿に譲るが、古事記を熟読すると狗奴国と烏奴国は密接な関係にあったことがわかる。このため、これらの8国は山の神（狗奴国）と野の神（烏奴国）の子であるとされたと考えられる。

2-3 火之迦具土神

伊邪那美命は神を生み続けたが、火の神の火之迦具土神（ホノカクヅチノカミ）を生んだために女陰を火傷して死んでしまった。伊邪那岐神が怒って火之迦具土神を斬り殺すと、死体の頭、胸、腹、陰部、左手、右手、左足および右足から合わせて8柱の神が生まれた。また、伊邪那岐命が妻に会いに黄泉国に行くと、伊邪那美命の体には蛆がたかり、頭、胸、腹、陰部、左手、右手、左足および右足に8雷神がいた。このように、火之迦具土神の神話では8という数字が2度使われているが、表1のグループ1の国数も8である。筆者は前に発表した論文²⁾で、倭国の大乱は、これらの8国による戦いであったことを示した。また、「火」には「建築物や山林などが焼けること」「怒りなどで無の中に起こる激しい感情」などの意味があり、「之」には「至る」、「迦」には「出会う」、「具」には「そなわる」、「土」には「領土（国土）」の意味があるので、火之迦具土神は「怒りによって国土の建物や山林を燃やした神」の意味であると解される。また、「芸」には「法則」、「速」には「速める」、「男」には「血気盛んな若者」の意味があるから、火之迦具土神の別名の火之夜芸速男神（ホノヤギハヤオノカミ）は、「夜におこすべき火を昼間から火を建物につけて廻った血気盛んな男」の意味である。これらのことは、火之迦具土神（火之夜芸速男神）の説話は、倭国の大乱を神話化したものであることを示す。火之迦具土神が生まれて伊邪那美命が死んだとは大乱が起こったことを意味し、伊邪那岐神が火之迦具土神を斬り殺したとは邪馬台国が勝利したことを意味すると考えられる。

倭国大乱の前には全ての国に王がいたが、大乱の後には王がいたのは邪馬台国と伊都国のみであるから、この2国が勝戦国で、他の6国が敗戦国であったことがわかる。魏志倭人伝には、道理がわかる国としてこれらの8国の他に投馬国が書かれている。倭国の大乱が起こった時には、投馬国は既に邪馬台国に従属していたと推察される。そこで、邪馬台国と

伊都国に投馬国を加えた 3 国を伊邪那岐命の刀の劔、鏑および柄に例えると、敗戦した 6 国は火之迦具土神の死体に例えられる。神話では、伊邪那岐命が火之迦具土神を斬り殺した時、劔に付いた血が落ちて 3 柱の神が生まれ、劔の鏑についた血がほとぼしって 3 柱の神が生まれ、劔の柄に溜まった血が垂れて 2 柱の神が生まれた。伊都国を刀の劔とすれば、劔から流れた血から生まれたとされる神の数は、伊都国の官・副と同じ 3 である（表 2）。また、邪馬台国を刀と鏑とすれば、刀の神と鏑から迸った血から生まれた神の合計は、邪馬台国の官の数と同じ 4 である。また、投馬国を刀の柄とすれば、柄に溜まった血が指の間から流れて生まれた神の数は、投馬国の官・副の数と同じ 2 である。さらに、倭人伝によれば、大乱後には、狗邪韓国と末廬国を除く各国に官・副が置かれた。これらの官と副の合計は 8 人であり、火之迦具土神の死体から生まれた神の数と一致する。従って、火之迦具土神の死体から生まれた 8 柱は邪馬台国が對馬国、一大国、奴国および不彌国に置いた官と副であると考えられる。

表 2 火之迦具土神を殺したことによって生まれた神と魏志倭人伝の官

古事記		魏志倭人伝	
神が生まれた部位	生まれた神	国	官・副
死体（頭） （胸）	正鹿山津見神 淤滕山津見神	對馬国？	官：卑狗 副：卑奴母離
死体（腹） （陰部）	奥山津見神 闇山津見神	一大国？	官：卑狗 副：卑奴母離
死体（左手） （右手）	志芸山津見神 羽山津見神	奴国？	官：咒馬觚 副：卑奴母離
死体（左足） （右足）	原山津見神 戸山津見神	不彌国？	官：多模 副：卑奴母離
劔についた血	石柙神 根柙神 石筒之男神	伊都国	官：爾支 副：泄謨觚 副：柄渠觚
刀	天之尾羽張	邪馬台国	官：伊支馬
鏑についた血	甕速日神 樋速日神 建御雷之男神	邪馬台国	次の官：弥馬升 第三の官：弥馬獲支 第四の官：奴佳鞮
柄に流れた血	闇淤加美神 闇御津羽神	投馬国	官：弥弥 副：弥弥那利

尚、伊邪那美命が火傷した苦しみから嘔吐すると、嘔吐物から金山毘古神（カナヤマビコノカミ）と金山毘売神（カナヤマビメノカミ）が、漏らした糞から波邇夜須毘古神（ハニヤ

スヒコノカミ)と波邇夜須毘売神売神(ハニヤスビメノカミ)が、漏らした尿から弥都波能売神(ミズハノカミ)と和久産巢日神(ワクムスビノカミ)が生まれた。金山毘古神と金山毘売神は金属、鉱石、製鉄、金属加工などの金属関係の神であり、波邇夜須毘古神と波邇夜須毘売神は陶器と土の神であり、弥都波能売神は水神であり、和久産巢日神は五穀と養蚕の神であるとされる。これらを纏めると、伊邪那美命は一国の産業を生み出したことになる。また、これらの神を生んだ伊邪那美神は苦しんだ末に死去し、その遺体は出雲国と伯耆国の境にある比婆山に葬られた。従って、この説話は出雲に新しい国が興ったことを示唆する。つまり、倭国の大乱が起こったことにより、出雲が倭国の争いに巻き込まれるようになり、このことが出雲神話の基になったと考えられる。

2-4 伊邪那岐神の衣服等から生まれた神

神話は続く。黄泉の国から帰ってきた伊邪那岐命が穢れを落とすために禊ぎをすると、脱いだ杖、帯、袋、衣、袴および冠から各々1柱、左右の腕輪から各々3柱、合計12柱の神が生まれた(表3)。腕輪から生まれた神は奥疎神(オキザカルノカミ)と辺疎神(ヘキザカルノカミ)のように左右で対になっているので、伊邪那岐命の衣服からは9組の神が生まれたことになる。表1に示したように肥前と肥後には併せて10国があったが、この内の投馬国の官と副は、火之迦具土神を斬り殺した時に柄に流れた血から生まれた神とされている。従って、伊邪那岐神の衣服等から生まれた神は、投馬国を除く肥前・肥後の9国の官・副であると考えられる。

先ず、杖から衝立船戸神(ツキタテフナトノカミ)が生まれた。「衝」には「動く」、「立」には「自然界の現象・作用が現われる」、「戸」には「水の流れの出入りするところ」の意味があるから、「衝立船戸」は潮流のことであろう。有明海の湾口部(早崎瀬戸)は潮の流れが速いことで知られているので、この神は早崎瀬戸に近い宇土市にあった不呼国の官を神格化したものであると考えられる。

次に、帯から道之長乳齒神(ミチノナガチハノカミ)が生まれた。「道」は「人・車・船などが進めるように整備された所」、「長」には「端から端までの隔たりが大きい」、「乳」には「乳房から出る液のように白く濁った液」、「齒」には「連ねる」の意味があるから、「道之長乳齒」は「白波が立つ広い海に面する国」の意味であろう。伊邪国があった諫早市は島原半島の付け根部分に位置し、南は有明海に面するが、北は橘湾を介して東シナ海に面しているのでやや波が荒い。従って、この神は伊邪国の官であると考えられる。

次に、袋から時量師神(トキハシノカミ)が生まれた。「時」には「過去からの時間の流れ」、「量」には「思う。考える」、「師」には「人々」の意味があるから、「時量師」は「昔からの考え方をする人々」の意味である。長崎県の大村市・佐世保市には縄文系弥生人の已百支国があったので、この神は已百支国の官であると考えられる。

次に、衣から和豆良比能宇斯能神(ワズライノウシノカミ)が生まれた。「和」には「穏やか」、「豆」には「小さい」、「良」には「優れている」、「比」には「楽しむ」、「能」には「才

能]、「宇」には「物事を成し遂げようとする心の動き」、「斯」には「切り裂く」の意味があるから、「和豆良比能宇斯能（わづらひのうし）」は「なごやかで豊かで楽しい生活をつくる力も家を壊す力もある」の意味であり、転じて恵と洪水をもたらす大河であると解される。従って、この神は筑後川の河口にあった都支国の官であると考えられる。

表3 伊邪那岐命の衣服から生まれた神々

衣服	生まれた神	言葉の意味	真の意味
杖	衝立船戸神	潮の流れが速い所の神	不呼国の官
帯	道之長乳齒神	波が荒い所の神	伊邪国の官
袋	時量師神	考え方が古い神	己百支国の官
衣	和豆良比能宇斯能神	暴れ川がある所の神	都支国の官
袴	道俣神	分岐点の所の神	好古都国の官
冠	飽咋之宇斯能神	活火山がある所の神	對蘇国の官
腕輪	左：奥疎神 右：辺疎神	（高天原と）親しくない神	彌奴国の官と副
	左：奥津那芸佐毘古神 右：辺津那芸佐毘古神	不知火が現われる所の神	姐奴国の官と副
	左：奥津甲斐弁羅神 右：辺津甲斐弁羅神	貝が沢山いる所の神	斯馬国の官と副

次に、袴から道俣神（チマタノカミ）が、冠から飽咋之宇斯能神（アキグヒノウシノカミ）が生まれた。「俣」は「分岐点」の意味であるから、「道俣」は「道が分かれるところ」の意味である。従って、この神は内陸部にあった好古都国の官であると考えられる。また、「飽」には「徹底的に」、「咋」には「なる」、「宇」には「家」、「斯」には「バラバラにする」、「能」には「力」の意味があるから、「飽咋之宇斯能（あきぐいのうし）」は「家を徹底的に壊す力がある」の意味である。従って、飽咋之宇斯能神は阿蘇山の近くにあった阿蘇国の官であり、道俣神は菊池郡にあった好古都国の官であると考えられる。

次に、左の腕輪から奥疎神（オキザカルノカミ）、奥津那芸佐毘古神（オクツナギサビコノカミ）、および奥津甲斐弁羅神（オクツカイベラノカミ）が、右の腕輪から辺疎神（ヘザカルノカミ）、辺津那芸佐毘古神（ヘツナギサビコノカミ）、および辺津甲斐弁羅神（ヘツカイベラノカミ）が生まれた。「疎」には「親しくない」の意味があるから、奥疎神と辺疎神は、高天原（邪馬台国）と余り仲が良くない国の官と副であると考えられる。筆者は、この国は邪馬台国と覇権を争ったくにであり、吉野ヶ里遺跡があった彌奴国であると考え。また、「那」には「あれ、あの、のように離れた物を指して言う言葉」、「芸」には「芸術」、「佐」には「そえる事」の意味があるから、「津那芸佐」と「辺津那芸佐」は「海岸線から離れた所にそえられた芸術」の意味である。筆者は、この芸術とは不知火のことであり、奥

津那芸佐神と辺津那芸佐神は八代市にあった姐奴国の官と副であると考え。また、「甲」には「殻」、「斐」には「模様が美しい」、「弁」には「分かれる」、「羅」には「網の目のように並べる」の意味があるから、「津甲斐弁羅」は「二枚貝が沢山いる海岸」の意味であろう。従って、奥津那芸佐神と辺津那芸佐神は杵島郡にあった斯馬国の官と副であると考えられる。

2-5 伊邪那岐神の禊ぎによって生まれた神

伊邪那岐命が瀬に入って禊をすると、黄泉の国の穢れから八十禍津日神（ヤソガマツヒノカミ）と大禍津日神（オオガマツヒノカミ）が生まれた。「穢れ」は、死・疫病・月経などによって生じた忌まわしく思える不浄な状態のことであるので、この2柱は厄災をもたらした神であろう。魏志倭人伝によれば狗邪韓国と末廬国には官・副がいなかったが、これは両国が倭国の大乱によって滅んだためと考えられる²⁾。両国の王は国を滅ぼすという厄災をもたらしたから、神格化された名が八十禍津日神と大禍津日神であると推察される。

次に、穢れを直すために生まれたのが、神直毘神（カムナオビノカミ）、大直毘神（オオナオビノカミ）および伊豆能売神（イズノメノカミ）である。大乱で滅んだ狗邪韓国王と末廬国王が「穢れから生まれた神は厄災をおこす神」であるので、「穢れを直す神」は国が滅ばないように守りを固めた国王であると考えられる。九州東北部には倭族が居住し、筑豊地方には把利国が、宗像に烏奴国が、豊前に支維国と狗奴国があって、この地域の盟主である宇佐の狗奴国は邪馬台国と対立していた³⁾。上述したように、把利国は九州東北部で最初に邪馬台国の侵略を受けた国であり、このために狗奴国王は守りを固めた可能性が高い。即ち、穢れを直すために生まれた3柱とは、狗奴国の官と、狗奴国王が支惟国および烏奴国に置いた官であると考えられる。実際、魏志倭人伝には、狗奴国には狗古智卑狗という官が置かれていたことが記されている。神生みの神話において、野の神（烏奴国王）と山の神（狗奴国王）は豊後と熊曾国にあった8国の親に見なされているので、両国は特に緊密な関係にあったと推察される。従って、神直毘神と大直毘神は烏奴国王と狗奴国を神格化したものであり、伊豆能売神は支惟国王を神格化したものであると考えられる。尚、「伊」は「この」、「豆」には「皮膚の下にできる粒状の水ぶくれ」、「能」には「耐える」の意味があるから、「伊豆能売神」は「痛みに耐えた人」の意味であり、転じて「邪馬台国からの攻撃に耐えた」の意味であると考えられる。

2-6 綿津見三神と住吉三神の誕生

倭国の大乱による最も大きな変化は、大乱前には覇権を握っていた奴国が邪馬台国の従属国になったことである。大綿津見神は奴国王であるから、伊邪那岐神が身体を洗った時に生まれた綿津見三神と住吉三神は奴国王の後裔であると考えられる。糟屋郡阿曇郷を拠点とした安曇氏は綿津見三神の後裔であるといわれ、その氏神である志賀海神社には綿津見三神が祀られている。従って、倭国の大乱の後、奴国王の後裔は那の津を離れて、拠点を糟

屋郡阿曇郷～志賀島に移したものと考えられる。後世、阿曇氏は糟屋郡を離れ、全国に散らばったことが知られている。この時に、阿曇氏は『漢委奴国王』の金印を志賀島に埋納したものと推察される。

一方、住吉三神の後裔は、住吉大社の神官職にあった津守氏である。綿津見三神は国津神であるのに対し、住吉三神は天津神である。また、阿曇氏は地祇であるのに対し、津守氏は天孫である。津守氏系図によれば、天火明命の四世孫の天忍人命は尾張氏の祖であり、弟の天忍男命が津守氏の祖である。従って、天忍男命が奴国王の後裔の娘を娶って生んだ子が住吉三神（津守氏の祖）であると推察される。

2-7 三貴神

伊邪那岐命が禊をした時、最後に生まれた月読命、須佐之男命および天照大御神は三貴神と呼ばれる。邪馬台国の女王卑弥呼は、天照大御神とモチーフが似ていることから、天照大御神は卑弥呼であるとの説がある。安本美典氏は、この説を科学的に証明した⁴⁾。安本氏によれば、正確な在位期間が解っている5世紀から8世紀の20人の天皇の在位期間の平均は約10年である。第31代用明天皇は586年頃に在位していたことが解っているので、これらの数字を用いれば、古代の天皇の大凡の在位期間を推定することができる。例えば、初代の神武天皇が没してから用明天皇が没するまでの大凡の年数は、 $10(\text{年}) \times 30(\text{代}) = 300(\text{年})$ である。 $586 - 300 = 286$ であるので、神武天皇は280～290年に在位したと推定される。安本氏はこの方法を用いて天照大御神は230～240年頃に活躍したと推定し、卑弥呼が活躍した時代と重なることを指摘した。

一方、邪馬台国畿内説の研究者たちは、卑弥呼は夜麻登登母母曾毘売命（ヤマトトモモノメビメノミコト）であると主張している。日本書紀によれば、夜麻登登母母曾毘売命は崇神天皇の時代に薨去した。卑弥呼は239年に魏に使いを送ったことが分かっているので、この説の場合には崇神天皇は240年前後に皇位にあったことになる。崇神天皇は第10代であるので、第31代用明天皇まで345年間に21人の天皇が在位している。従って、卑弥呼は夜麻登登母母曾毘売命であると仮定すると、天皇の在位年数は平均16年になる。

宋書夷蛮伝倭国の条（宋書倭国伝）によれば、倭の五王（讃、珍、済、興および武）が宋を朝見した。讃と珍に対応する天皇は確定していないが、済は第19代允恭天皇、興は第20代安康天皇、武は第21代雄略天皇であることで研究者の間で概ね意見が一致している。そこで、安本氏の方法に習って、これらの天皇の在位年代を推定し、宋書の入貢記録と比較した（表4）。卑弥呼＝天照大御神説に基づいて、天皇の在位期間を約10年として計算すると、これら三代の天皇の在位年代は宋書に記述された入貢年と重なる。一方、卑弥呼＝夜麻登登母母曾毘売命説に基づいて天皇の在位期間を16年として推定すると、これら三代の天皇の在位年代は宋書の入貢記録から大きく乖離する。このことは、夜麻登登母母曾毘売命は卑弥呼ではないことを示す。卑弥呼は天照大御神であり、欠史八代や日向三代も実在した可能性が高い。魏志倭人伝によれば、卑弥呼には弟がいて、政治を助けた。古事記では、高御

産巢日神（タカミムスビノカミ）が天照大御神と共に政治を行っているので、高御産巢日神が卑弥呼の弟であると考えられる。

表4 卑弥呼を天照大御神または夜麻登登母母曾毘売命として
推定した倭の五王の入貢年

宋書		天皇	推定在位年代	
倭王	入貢年		天照大御神説	夜麻登登母母曾毘売命説
済	443 451 (460)	允恭天皇	460～470	385～401
興	(460) 462 (477)	安康天皇	470～480	401～417
武	(477) 479 502	雄略天皇	480～490	417～433

邪馬台国の女王卑弥呼と狗奴国王の卑弥弓呼は戦争をした。日本神話では天照大御神と須佐之男命が争ったとされ、このモチーフは卑弥呼と卑弥弓呼の関係に似ている。また、魏志倭人伝における伊都国王と記紀における月読命は、ともに名のみで事績がない。従って、卑弥呼が天照大御神であるならば、狗奴国王の卑弥弓呼が須佐之男命であり、伊都国王が月読命であると考えられる。日本書紀には、須佐之男命と娘の宗像三女神（多紀理毘売命（たぎりびめのみこと）、市寸島比売命（いちきしまひめのみこと）、多岐都比売命（たぎつひめのみこと）は宇佐嶋に降臨したと書かれている。宇佐には狗奴国の都があったと推定されるので、日本書紀も須佐之男命が狗奴国王の卑弥弓呼であることを示唆している。

邪馬台国の時代には「倭国」と「倭」があり、伊都国王は倭国の王であり、邪馬台国王と狗奴国王は倭の王であることを示した²⁾。また、伊都国で政務を執っていた一大率は、後漢の時代に冊封国の奴国を管理するために置かれた楽浪郡の出先機関であり、強大な武力を有していた。従って、一大率が常駐していた伊都国は、謂わば、治外法権であったため、伊都国は大乱後も王国として存続したと考えられる。ウィキペディアによれば、朝貢国は中国の暦（太陰暦）を使うことが義務づけられていた。伊都国王は月の満ち欠けから暦を作る役目を担っていたので、日本神話では月読命と称されたと考えられる。

まとめ

倭国は、江南から渡ってきた倭人族が建てた国である。倭人族は東シナ海を渡ってきた時、

あたかも天と地が分離したかのように、水平線から九州が姿を現すのを目にした。これが、日本列島における倭国の歴史の始まりであり、古事記で云うところの天地開闢の時であると考えられた。倭人族が渡ってきた頃、朝鮮半島から倭族が渡ってきた。従って、天之御中主神は先住民族の縄文人で、高御産巢日神は倭人族で、神御産巢日神は倭族であると考えられた。また、弥生時代中期末に、満州から古満州族が日本海沿岸に、中国南部から越族が琉球列島を経て太平洋側に渡ってきた。宇摩志阿斯詞備比古遲神は古満州族であり、天常立神は越族であると考えられた。

神七代は、日本列島（国常立神）を神格化したもので、豊雲野神は雨を降らす雲であり、宇比地迺神と須比地迺神は家であり、角杙神と活杙神はそこに生育する植物であり、意富斗能地神と大斗乃辨神はそこに生息する動物であり、淤母陀琉神と阿夜訶志古泥神はそこに住む人（縄文人）であり、伊邪那岐神と伊邪那美神はそのような日本列島に渡ってきた倭人族と倭族であると考えられた。

国生みの神話は、倭人族と倭族が九州に渡ってきて、大和政権を築くまでの歴史の概略を神話化したものと考えられた。『天の浮橋』は船であり、『天の沼矛』は櫂であり、オノゴロ島はトカラ列島であると考えられた。倭人族はさらに九州を目指したが、「水蛭子（ヒルコ）を葦で作った船に乗せて流した」との神話は、海が荒れたために船が転覆して人々が死亡したことを、「淡島」は難破した船が九州以外の島に漂着したことを示すと考えられた。伊邪那岐神は江蘇省から東シナ海の周りを左廻りに九州に渡った倭人族であり、伊邪那美神は山東省から朝鮮半島を経て東シナ海の周りを右廻りに九州に渡った倭族であると考えられた。国生みは、倭族が朝鮮半島から渡ってきて淡路島に至った順路を逆にしたものであると考えられた。島生みは、倭人族が江南から渡ってきて日本を統一するまでの順路を逆にしたものであると考えられた。

伊邪那美神が生んだ神は、倭の 30 国と侏儒国、黒齒国および裸国の王を神格化したものであり、大事忍男神は邪馬台国王であり、大綿津見神は奴国王であり、大山津見神は狗奴国王であると考えられた。火之迦具土神の神話は、邪馬台国と倭国（狗邪韓国、對馬国、一大国、末廬国、伊都国、奴国および不彌国）の間で行われた戦争（倭国の大乱）を神話化したものであり、伊邪那美神が死んだことは戦争が始まったことを意味し、倭国の 8 国王を殺して伊邪那美神と共に黄泉の国に閉じ込めたことは戦争が終わったことを意味すると考えられた。火之迦具土神の死体から生まれた 8 柱の神は、邪馬台国が對馬国、一大国、奴国および不彌国に置いた官と副を神格化したものであると考えられた。火之迦具土神を殺した時に、劍から落ちる血から生まれた 3 柱の神は伊都国の官と副を、刀の神と劍の鐔に溜まった血がほとぼしって生まれた 3 柱と劍の神は邪馬台国の官と副を、劍の柄に溜まった血が指の間から流れ落ちて生まれた 2 柱は投馬国の官と副を神格化したものであると考えられた。

伊邪那岐神が褌ぎをするために脱いだ衣服から生まれた神は、投馬国を除く肥前・肥後の 9 カ国の官と副を神格化したものであると考えられた。伊邪那岐神の穢れから生まれた八十

禍津日神と大禍津日神は、倭国の大乱で滅んだ狗邪韓国王と末廬国であると考えられた。穢れを直すために生まれた 3 柱は、邪馬台国に対抗する狗奴国王が烏奴国、支惟国および狗奴国に置いた官であると考えられた。体を洗った時に生まれた住吉三神と綿津見三神は、大乱で王の座を奪われた奴国王の後裔であると考えられた。左目を洗って生まれた天照大御神は卑弥呼であり、右目を洗って生まれた月読命は伊都国王であり、鼻を洗って生まれた須佐之男命は狗奴国王の卑弥弓呼であると考えられた。

参考文献

- 1) 大川直士 倭国の創生期 古代史ネット (2024)
- 2) 大川直士 邪馬台国の時代 (1) —倭国の大乱の前後— 古代史ネット (2024)
- 3) 大川直士 邪馬台国の時代 (2) —倭の 30 国— 古代史ネット (2025)
- 4) 安本美典 邪馬台国への道 徳間書店 (1990)